伝説の反対側

朝月弥宵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伝説の反対側

【Ｎコード】
Ｎ５０９５Ｘ

【作者名】
朝月弥宵

【あらすじ】
両親がいない凛は生まれて直ぐ不思議な力を発揮し、親切な村人から大切に育てられる。
やがて凛は世界を救う勇者として成長した――。

……え？　俺？
俺はただの村人Ａとかだな。正真正銘ただの人。一つだけ備考、

凛の幼馴染。

プロローグ（前書き）

勇者とその幼馴染のお話です。話がもう少し進むと残酷な描写や女の子に恋する女の子が現われるので苦手な方は注意です。

プロローグ

世の中には“主人公”と呼ばれる奴等が存在する。それは王家の血を引いていたり、天空人の生き残りだったり特殊な設定をかかえて生きている。

そして主人公達にはそれぞれ英雄になるための物語が用意されている。どんなに困難な難易度でも主人公達は挫けずクリアし世界を救う。まるで絵本の中の出来事みたいなハッピーエンドだ。

――だが、その裏側にいる存在については中々語られない。

何故か？　そんなの目立ちたくないからさ。

これから話すのは俺と俺の幼馴染のお話。

第一話

心臓がこれまでに無い位の勢いで早鐘を打っている。ただ突っ立っているだけなのに緊張で倒れそうだ。新しい服の袖で汗を拭う。あいつはまだか、いつもみたいに遅刻してくるんじゃないだろうな。

近所のおじさんもおばさんも、いや村中の人が凛を心待ちにしてそわそわしていた。村で一番広い講堂には精一杯の飾りが溢れていて非日常という雰囲気を十分出している。

だが主役が来ない。俺の頬から冷や汗が滴り落ちるとほぼ同時に慌しげな足音が近づいてきた。

「遅れました！！　すいませんっ！」

村の人の視線を集める中、鎧のまま突っ込んできた凛。

ああ、やっぱりこいつはいつもどおりだ。

「お前本当変わんねーな。ガキというか何と言うか」

飛び込んできた凛を筆頭にした成人の儀がついさっき終わり、今は一年に一回のお祭り騒ぎ。それも例年より騒がしいのはこのチビで問題ばかり起こす幼馴染が原因だ。

「えーっ！？　酷いよ風牙。風牙までそんな小言を……」

大袈裟に呆れてみればほっぺを限界まで膨らまされて抗議された。
凛曰く、俺が落ち着き過ぎているだけらしい。無論そんな事はないと即座に反論するが。

暫くはいつも通りのやり取りを楽しんだ。からかう俺、真剣に、だが何処かずれた回答をする凛。小さい頃から変わらないこの関係も今年が多分最後だろうから。
臭い感傷が胸に響いた。

ふと凛が髪を引っ張る。地味に痛い。

「風牙の髪、いいね」

そう言って笑う凛の顔は酷く大人びて見えた。黒髪の凛は時たま俺の髪を触る。何の変哲もない、力が無い事を表すこの髪色は嫌いだったが凛に伝えた事はない。
黒髪、それだけで勇者なんていう世界を背負ってしまった凛に対する何よりの冒涜だからだ。

「だろ？　ちゃんと手入れしてるからな、お前と違って」

「な！！？　私だってちゃんと手入れしてるよ！？　って聞いてないでしょ！！」

「あはは。敬語抜けてるぜ？」

「！！」

今更口押さえても遅いっての。怒ってる時とか気を許せる時に見

せる素の凛。例えば今みたいな瞬間が俺は好きだ。

生まれて直ぐ、黒髪だった凛はこの辺鄙な村の一角に捨てられていたらしい。当時は俺も赤ん坊だったので詳しい事は判らない。

魔力を宿す赤、妖力を宿す紫、幻力を宿す青、そして無限の素質を表す黒。

この世界の理を表す髪色によれば凛は世界を破滅もさせ得るし、救済させうるっていう物騒な立場だった。他の色ならまだ例外はあり得る。実際赤い髪を持ちながら全く魔法を使えない人間なんてザラだし、努力を重ねて僅かとはいえ妖力を手に入れた人間だっている。

だが黒は違う。歴史上に名を残すいかなる人物、それが例え魔王であろうが勇者であろうが髪は黒かった。

実際、現在この世界を支配している魔王とやらも黒い髪に赤い瞳の魔物らしい。

だからこそ凛を育てるにあたってこの村は他の村との関わりを十五年も絶つ事になった。当時の若様、今の村長と亡き前村長が村中を説得して凛を育てる事にしたのだから。

凛の存在は魔王ではなく英雄であると信じている。俺だけじゃない、村中の人間が信じているからこそ凛は生きていられたのだ。

その信頼が今凛を旅立たせるとはいえ。

「……ま、成人もしたし、風牙との馬鹿騒ぎも出来なくなりますね。私は明日には出ますし」

華奢な体には到底不釣合いな重たい鎧でガシャンと凛は腰を下ろ

した。鈍い純銀の鎧は凛の育て親である村長の自腹らしい。いつもケチなじーさんが奮発したもんだ。
並んで腰掛れば目線がずれた。当たり前だが男の俺の方が頭一つ分ほど高い。体も俺の方が鍛えられている。
それでも、それでも勇者として選ばれたのは凛なのだから凛は明日にはこの村を出なければならない。
誰に強制されたわけでも無く自分の意思で世界を救いに行くと言ったこいつは馬鹿だと思う。
毎日毎日飽きる程修練を欠かさないこいつをアホだと思う。

「風牙はドーンと構えて待っていて下さい。魔王なんてちゃちゃっと倒して帰ってきますから」

昔から根拠の無いこいつの言葉に安心する自分も馬鹿だと思う。

「俺も行くわ」

するりとずっと言いたかった言葉が出てきた。足手まといだって判ってる。でも盾の代わりくらいは出来るかも知れない。辛い時に支えてやるくらいは出来るはずだ。幼馴染の俺にしか出来ない事がきっとあるはずだ。

「危ないですよ。おじさんもおばさんも悲しみますから」
「俺の親父がそんなんで悲しむたまか？　ってか俺はもう決めてたんだ。前からな」

隣にいる凛は何も言わずに頷いた。こうなった俺が頑固だって向こうもわかってると思う。凛も頑固だが、俺も相当だ。

凛の肩が震えていたのを、その晩だけは見ないふりをした。

勇者にだって、怖いものはあっていい。

第二話

「お前、凛が好きだろ？」

「ああ」

出立を告げ、父さんの放った第一声がそれだった。たかが辺鄙な村の猟師、それなのに父さんが持つ威圧感はまだまだガキの俺にとっては幼い頃から変わらない威力を持っていた。

いや、かって経験した事がないくらいだ。僅かながら赤がかった髪を纏め上げ、村を守る結界を張る父さんの背中はいつもでかい。

ピリピリした中父さんが言った言葉は的を射ていた。俺は凛が好きだ。幼馴染としてだけでなく。

だからこそ力になって隣にいたい。例え凛が俺を必要としないほど強くても、力になりたい。

「お前には力がない。それも判ってるな？」

黙って首肯するだけで心が折れそうだ。母さんは青、父さんは赤と“色持ち”の両親に対して何の力もない俺が凛の旅に着いて行くのがどれだけ危険かは判ってるつもりだ。

村を一歩出れば様々な魔物が襲ってくる。身を守れなければ最悪死んでしまう。

死ぬのは怖い、考えただけ嫌な汗が全身を伝うくらいにはその重さは知ってる。その上で尚、父さんは警告していた。

「凛を守りたいんだ。あいつが守られるような人間でもないし、力があるのも判ってる。でも誰かがあいつを支えてやんねーといけないんだよ」

昨日の晩、凛は声を出さずに泣いた。泣き方すら判らない凛を誰が守ってやれるってんだ。

鋭い目で睨み付ける父さんから目をそらさない。怯んだら何が守るだ、これからもっと重たいモノからも守るって決めたんだ。

刺すような視線を放っていた父さんが難しい顔のまま呟く。

「……母さん、支度をしてやってくれ。凛の出立は後二時間後だからな」

「……ありがとう」

「馬鹿いえ。お前は頑固だからな、俺が何言っても出るんだろ？それなら俺達が出来るのはせいぜい死なない準備をしてやることだ」

豪快に笑う父さん。急に緩んだ空気の中、この両親の元に生まれてきた事を感謝した。

確かに父さんの言うとおり止められたら勝手に旅立つつもりでいた。だからといって村の皆がどうでもいい訳じゃない。

大切だからこそ理解して貰いたい事もある。俺の何より

「ほら、風牙」

母さんから手渡された袋。驚いたことに予め旅行に必要なものが全て詰まっていた。

驚いた俺を見て母さんが意味深な笑みを浮かべる。

「あら風牙。母さんの力を忘れたの？」

ガラス玉のような瞳が青く光った。幻力を使った予知でこうなる事が判ってたみたいだ。ニヤニヤとあまり上品とはいえない暖かい笑いが母さんの顔に広がる。

「父さんも知ってのかよ……」

要するにさっきまでのプレッシャーは俺を試すため。完全に力が抜けた。父さんも母さんも演技が上手い。

正座していたため痺れた足をほぐし、立ち上がる。十五年も育った小屋は離れがたいほどの愛着がある。いや、自分の家だけでなく村全体に感じているそれは非常に厄介に俺にまとわりつく。

まとわりついたものが決心を鈍らせそうになって、ぐっと歯をくいしばった。二度と帰ってこれないかもしれない。負の感情に負けそうになる。あっという間に平衡を欠いた精神が情けない。

凛なら笑い飛ばす、凛なら笑い飛ばす、凛なら笑い飛ばす。

固まっていた俺の肩をポンと父さんが叩いた。金縛りから解かれたように体が自由になった。呪文のように唱えた凛の意思の強い顔が父さんに重なった。

「いってこい」

その顔がかっこ良くて、ガキらしくて馬鹿みたいな尊敬の念が沸いた。

「それでは、いってきます」

第三話

見送りにはほとんどの人が来てくれた。両親、村長さん、いつも俺に狩りを教えてくれていた猟師の先輩達。この村には俺達と同じくらいの子供はいなかったから小さな子供まで。村中総出で出立を見送ってくれた。全部で四十人ほどだが、それでもこの小さい頃から見知った顔が全部ある。

凛はといえばいつも通りヘラヘラ笑って行ってきますだなんて言っていたけれど俺はそれどころじゃない。猟師のおっちゃん達に囲まれていたからだ。

「お前、凛ちゃん絶対守れよ！」

「二人で帰って来なかったらあんた、しばきたおすからね！！」

「風牙ももう一人前の猟師としての技能はあんだ。ちゃんと食料ぐらい確保しろよ！」

「はっ！　訓練でいつもへばるくらい風牙君いじめてたの誰だい！！」

「ばーか。あれは愛だよ愛」

力強く背中を叩かれる。一応狩りに使っていた弓矢と小ぶりのナイフを押し付けられ、大勢の大人にもみくちゃにされた。ただでさえ癖毛なのに……。

多分ひどい事になっているだろう俺の頭を適当に撫で付けながらこれまたおばさん達に囲まれている凛の元に辿り着く。

「だ、大丈夫か？」

ほっそい凛をなんとか確保する。途端おばさん達の黄色い声援？が上がるが気にしない。含み笑いに取り巻かれるが当の凛は全く気づいてないみたいだ。

「はい！　皆さんと別れの挨拶も済みましたし、そろそろ行きますか」

なんとか凛の手を引いて、人の輪から抜け出す。握った手に緊張して少し力が入ってしまう。凛の手は一回り小さくて簡単に包めてしまう。

あー！　好きな奴と手を握ってるだけでこんなに幸せなのか！

なーんて思春期らしい感情に浸っていたら村長さんから拳骨を食らった。

「お前、うちの凛に何考えてんだ！？　さっさと出発しないか！」

痛い……。流石は凛の育ての親、馬鹿力は相変わらずだ。大口を開けて笑う村長さんの笑顔は凛の笑い方にそっくりで、ついつい苦笑してしまう。凛には女なんだからもう少し可愛らしい笑い方をして欲しいんだけどさ。

「行きましょう、風牙！」

「おう！」

でも大口を開けて笑う凛のおかげで何でも出来そうな気がするからやっぱり凛にはこの笑顔でいてほしいかもしれない。

村を守る結界を出て、一時間。早速俺は小型の虫モンスターに苦戦していた。顔も見たこともない魔王とは違い、結界付近に狩りに行った時に見たことはあった。

でかいカブトムシみたいな奴とか蚊みたいな奴とか。強そうに見えないと高をくくっていた俺の考えは直ぐに吹き飛ばされた。

毒を分泌する針やら勢いよく突っ込んでくるそいつらのせいで中々先に進めない。凛は右から左へと受け流しつつサクサク倒していたが、化けモンだと思う。

小柄な体で髪を靡かせながら新手を切り捨てる姿に見とれていたら横から角が異様に発達した訳のわからないモンスターに突撃された。

ってぇ……。

血は出ていないが脇腹に鈍痛が響いている。一撃を食らわして離れていったそいつを視界の端に捕らえ、痛みを堪えて弓を構えた。

いつまでも痛いとか言ってられない。揺らぎそうになる体を支えてしっかりと足を開いて狙いを定める。教えて貰ったとおりに真っ直ぐ放てば矢はかなり離れていたそのモンスターに命中した。

いつの間にか死骸の山を築き上げていた凛が大袈裟な拍手をする。

「凄いですねー。今風牙が討ったのはカーランっていう危険度が下級の最上位の奴ですよ」

下級の最上位って複雑だな。弓をしまいながらカーランというモンスターに近づく。真っ赤な血が流れていて少し心が痛んだ。やらなきゃいけないとはいえ、こいつらだって生きてたんだよな。

「お前の足元に転がってるのは中級の奴ばっかだろうが。本当、凄いな」

名前はわからないが本で見たことあるモンスターもゴロゴロ転がっている。俺は凛と違って書物なんざ普段は読まないがそれで知ってるくらいだからある程度有名なモンスターなんだろう。

「偶然ですよ。それに、風牙さっきから最低限しか狩ってないでしょう？」

バレてたか。甘さは命取り、猟師の先輩達にもそう教わってきたから凛にはバレたくなかったのに。

呆れられるかと思ったが振り返った凛の顔に浮かんでいたのはどこか嬉しそうな表情だった。黒い大きめの目が何度も瞬きしている。

これは凛が嬉しい時の癖だ。何がそんなに嬉しいだろうか。

「まぁ俺の性分みたいなもんだから勘弁してくれよ。あんまり無駄に殺すのは好きじゃない」

確かに魔物やモンスターは人間からしてみれば害悪かもしれない。でも逆から見れば人間は害悪だ。

「知ってますよ。何年一緒にいると思ってるですか」

喋りながら後ろから飛んできた虫を剣で弾き飛ばす凛。その顔には一点の曇りもない。

「そういう優しいところ、私は好きですよ。風牙が戦闘狂みたいになったら殴り飛ばしますし」

はは、凛が言うと洒落にならん。若干引きつった顔で相槌を打つ。

気がつけば太陽が真上に来ていた。そろそろ休憩すべきか。いくら体力馬鹿の凛とはいえまだ都市部にも辿り着けていないのに飛ばし過ぎるのはよくないだろうし。

不満げな凛を説得し、俺達は近場の洞窟に腰を下ろす事にした。ひんやりとした空気が心地よい。

まだまだ暑い季節ではないが凛は鎧だし俺だって狩りのための長袖を着て激しい動きをしているんだから汗が全身から吹き出ている。

凛が鎧を脱ぎたいと言うので洞窟の少し奥に行かせた。此処で着替えるなんて冗談じゃない。適当に選んだ服を押し付けて一息ついた。

たかだか十五の凛が目指すのは魔王討伐。魔王っていうのはどんな種族かすら判らないがそいつがいるおかげで魔物やモンスターは力を増すし、王国が滅ぼされたりしているらしい。全部村から出たことのない俺達には聞いたことしかない話だが、関係の無い世界を救うっていうのが凛の目標なら俺はそれを手伝おう。

俺の世界は狭くて単純な事に凛だけなのだ。自分の馬鹿さ加減にいい加減ため息しか出てこない。
普段凛にあれだけ馬鹿と言っておいて一番ばかなのは俺だ。

乾いた洞窟に草を払う音が響いた。続いて何やら近づいてくる足音が二つ。放って置いたナイフと弓矢を身につける。凛に大声で知らせるべきか。
しかし相手が気づいていなかった場合こちらの居場所を知らせるようなもんだ。それに相手の目的すら判らないから対応のしようがない。
ただ息を殺して構える。

足音はどんどん近づいてきて、入り口の簡単なカモフラージュを外した。
そして逆光の中俺が見たのは凛と同じ“黒髪”の青年と、俺と同じ茶髪の女だった。

第四話

小さい頃から言われていた事がフラッシュバックする。

「黒い髪を持つ人間は強大な力を持っているのよ。だからあなたが凛ちゃんを支えてあげなさいね」

そして今眩しいくらいの光を背に凛以外の黒髪を持つ人間が立っている。理由もなく肌が粟だった。さっきまで感じてた冷気とは違う冷たさが背筋を伝う。

こいつは何者だ？

干からびた喉から声を絞り出そうとしても全然声が出ない。硬く握り締めた手が震えた。これは理性じゃない、直感だ。

「……あのー？　こんにちは？」

硬くなっている俺の頭上からかけられた声は随分間抜けなものだった。

「悪いな！　驚かせたみたいだし」

「だから私はあれ程止めろって言っただろ」

ついていけない。

全くもってな！　勝手に喋りだした目の前の男は翔だなんて名乗り、続いて隣にいた女も葵と名乗った。しかも翔は物騒なほど大きい大剣をいきなり放り投げるのだから心臓に悪い。

一方的な自己紹介が終わる頃に漸く凛が戻ってきて今は四者面談中。流石の凛も呆気にとられたようで最初は翔を見て絶句していた。

「えっと凛は俺と同じ黒髪なのか！？　いやー俺初めて同じ色の人にあったぜ」

自然な仕草で翔は凛の髪に触れる。凛はびっくりしたように首を振ったが振り払いはしなかった。

……こんな下らないやり取りで少し胸がチリチリと痛む。

にしても翔って奴、慣れ慣れしい。嫌いな訳じゃないし多分男の俺からしても整った顔立ちだし女にはモテるんだろうが苦手なタイプだ。

何と言うか、能天気そうで常に周りに人がいそうとでも言うんだろうか。

「翔、女性の髪にいきなり触るのは失礼だろう。すまない、こいつはいつもデリカシーに欠けているんだ」

葵は軽く翔の頭をはたいた。その流れから見るに二人は相当仲がいいんだろう。翔に比べて葵は年齢以上に落ち着きがあるように見える。先ほどの自己紹介で俺達と同い年だと言っていたがとてもそ

うは見えない。切れ長の目は慌てる時が無いみたいに冷静だった。

「あ、悪い悪い。にしても何してるの？　君ら？」

それはこっちが聞きたいわ、なんていう本音を押し殺してどうしたものかと考える。魔王退治だと素直に言ってもいいが正直まだこの二人を信用しきれてない。

適当な事を言って誤魔化しておくか。

「あー、それはだな」

「魔王を討伐しに！　世界を救いたいんです！」

って、凛には嘘とか無理ですよねー。嘘なんかつけない凛と一緒に口裏あわせもなし嘘をつくっていうのが無理な話だった。

内心ずっこけた俺を余所に凛は瞳を輝かせながら熱弁を奮う。

捨て子だった自分を拾ってくれた人たちの期待に応えたいこと。

魔王を倒す事で世界が平和になるなら討伐したいこと。

小さい頃から訓練を続けていたこと。

俺が幼馴染としてついてきたこと。

凡そ俺達が抱える事情なんてのを喋り終え、凛は息をついた。白い頬が喋り過ぎたために赤く染まっている。

はぁ……。

心の中だけでため息をつく。凛の真っ直ぐなところは好きだが誰かれ構わず信用するのはどうなんだよ。これから魔王を倒しに行くのに罠とか謀略とかの可能性についても教えといた方がいいんだろうか。

きっと翔達も反応に困ってるよな。頭を抱えたい思いで見やったら思いの外二人は真剣な目をしていた。

「成るほど。私達と目的が一緒ということか」

黙って聞いていた葵から離れた言葉はとても意外なもので。目的が一緒……という事は翔たちも魔王討伐に行くってことか！？

クエッションマークを浮かべる俺達に今度は翔たちが話す番だった。

「俺、これでも王子なんだ。ゴルドー王国の。んでお付きの従者が葵」

ちょっと待て。衝撃発言過ぎてついていけない。翔が王子？　確かに身なりは整っていて俺の猟師丸出しの服とは違う上等な服だけど、ってそうじゃない。

「ゴルドー王国って、あの商業王国のか！！？」

海に面し、中継貿易で名を馳せるあの！？　書物に拠れば大陸でも有数の国家の筈だぞ。

「昔の話です。今はゴルドー王国はありません。首都は壊滅し国民は散り散りです」

「なっ……」

「嘘でしょう……」

言葉を失う俺達に翔は苦笑いを零した。
いいんだよ、なんて笑って言える話じゃないだろう。翔達からしてみれば故国であろうその国はどれだけ大切だったんだろう。
俺は翔の事を能天気だと思ったがそうじゃない。こいつは強いんだ。
急に俺より少し大柄なだけの翔が凄く大人に見えた。

「それで魔王なんてモンに国滅ぼされちゃったからさ、俺達魔王倒すんだよ。そんで国民を呼び戻すんだ」

照れたように笑う翔に葵。葵の切れ長の目にも、翔の人懐っこそうな目にも強い意志が宿っていた。絶対を込める硬い決意が表情だけで伝わってきた。

なんだか凛を守るだなんて個人的な感情で魔王討伐に向かう自分が少し恥ずかしくて上ずった声で質問した。

「そう、なのか。いつから旅してるんだ？」

王子として不自由なく育ったであろう翔と王子付きの高級侍従である葵たちは一体どれだけ苦労したんだろうか。たかだか数時間であれほど大変なんだ。
ゴルドー王国は南西の位置にある海辺の国だ。中心のこの辺境の土地までかなり距離がある。

「あー、えっとー」
「……三年でしょう。いつになったら算術が出来るようになるんですか」

呆れたように言った葵の回答にまたも言葉が出てこなかった。二

人は軽く言っているが三年なんて二人は十二歳の時から旅してるって事じゃねぇか。

「か、翔と葵は何を目指してるんですか？　私と風牙は旅をはじめたばっかで街を目指すしかなくて」

凛の言うとおり俺達は先ず南にあるという大きな街を目指していた。地図上では距離が大してない機械産業が発展した街だ。

「実は俺達も実際に動き出すのは初めてなんだ。今までちょっと修行してて」

「幸い王国の近衛隊隊長と合流出来たので稽古をつけて貰っていたんです」

なるほど。道理で服に汚れが少ないのか。二人の服は動きやすさを重視しているとはいえ上等な布を使っている。汚れは目立つはずだがあまり無いのはそういうわけだったのか。

気がつけばもう太陽が傾き始めていて洞窟の中には西日が差し込んでいた。そんなに話し込んでいたんだろうか。葵の茶色い髪は太陽の光を浴びて真っ直ぐなポニーテルの影絵を洞窟の地面に作った。

大きく伸びをする凛とでっかく欠伸をする翔。この二人は黒髪ってだけじゃなく何処か似てるかもしれない。そう思うと少しだけ苦手だと思っていた念が消えた。

きっと悪い奴じゃない。会ったばっかの人間を簡単に信用するなんて凛の事を言えないが何故か翔も葵も悪い奴じゃない確証があった。

「もうさ、この際俺達一緒に行こうぜ！　凛や風牙も魔王倒したいんだろ？　数は多い方が絶対上手くいくって！！」

翔の突然の、それでいて心強い提案に四人で頷きあって俺達は夜の帳が下りてくるのを待った。

第四話（後書き）

どんどん話が膨らんでいってキャラ達に置いてけぼりにされないように必死な弥宵です

色々小説書いていて大変ですが読者さん、感想を書いてくれる人がいてとても嬉しいです

これからゆったりお付き合い頂けると幸いです

第五話

結局俺達は洞窟で一晩明かすことになった。
夜は魔力が増す。全員が魔法を使えない俺達は動かない方が得策だと判断したのだ。

二人づつ交代で見張りをする事になり、先に凛と翔を休ませる事にした。二人とも疲れてないなんて言い張ってたが嘘に決まってる。翔は知らないが凛は半日ほどモンスターを切り続けていたのだ。いくら鍛えてるとはいえ疲労が蓄積してない方がおかしい。
……それに惚れた女に少しでも早く休養をとって欲しいなんて個人的な感情もあったが。

翔も葵に説得されたらしく二人は洞窟の少しだけ平らになっている場所へ横になった。予め用意していた焚き火の爆ぜる音だけが響く。

凛も翔も直ぐ寝てしまって葵と二人きりだが中々喋りだせなかった。それどころか、どこを見ればいいのか判らない。考えてみりゃ今まで年の近い女なんて凛ぐらいなもんで、その凛だって幼馴染としてずっと一緒にいたから慣れていただけであって。

ぐるぐる考えているうちに心臓が勝手にテンポをあげていく。なんか喋らないと気まずい。でも何を喋れば……。

「あの」
「ふっっへ！？」

……。

ぐぁあああああああ！　何だよ！？　ふっっへって何だ！！

緊張しすぎだろ……。

恥ずかしすぎる。穴があったら入りたい。今まで凛がアクティブ過ぎるだけかと思っていたがもしかして俺は人見知りなのかも知れない。いや今はそんな事よりも葵だ。

葵はなんだか微妙な表情をしていた。視線がぶつかった瞬間、申し訳なさそうに噴出された。

「すまない。つい」

「いいんだ、気にしないでくれ……」

照れたように笑う葵。少しだけ緊張が解れて漸くまともに顔を見れた。凄い美人では無いが整った顔には警戒心とかは混じってなくて、笑った顔は混じりけなしの友愛が感じられた。それが嬉しいと思った。

今まで凛以外に同年代の友達なんていなかったから初対面とはいえこうまで純粋な厚意を向けられるとむずかゆいくらいだ。

「風牙に聞きたい事があるんですが、いいでしょうか？」

「おう。答えられる範囲なら何でもいいぞ」

空気が少しだけ重くなる。真面目な顔に切り替わった葵に自然とこちらも背筋が伸びる。

「特殊な力、って使えますか？」

言い切った後に遠慮がちに目を伏せられた。俺よりやや明るめの髪が葵自身にも特殊な力がない事を示しているがやはり気になるんだろう。俺だって凛の力になりたくて書物を読み漁って探した。色持ちじゃない奴が魔力や妖力、幻力を身につけられる方法を。

「持ってない。正真正銘ただの人間だ」

努力で魔法を使えるようになる人間もいるらしいがそれだって才能がいる。俺にはその才能すら無かった。どの方法で契約しようとしても精霊を呼び出せなかった。

魔法を使う為の前段階の契約すら俺には出来ない。圧倒的に才能がないのだ。

情けないが、葵に気を使わせたくなくて力なく笑う。

「そう、ですか……。私も、使えないんです。失礼な事を聞きました」

「いいよ。でも凛達の足手まといにはなりたくないよな」

「ええ。翔が私の生きる価値ですので」

「そっか」

言い切った葵の妙に断定的な口調にきっと葵も俺と同じなんだと思った。暫く沈黙が続く。炎だけが場違いなほど明るかった。時々揺らめく影が葵の顔を照らす。覚悟していた回答だったんだろうが、ショックが滲みでていた。

かける言葉なんて俺には見つからない。何を言っても葵には無意

味だしむしろ葵の決意とか踏みにじるような気がした。俺にとって一番大事なものが凛なように葵にとっても一番大事なのは翔なんだろう。

たとえ相手がそうで無くても。

凛にとって一番大事なのは世界だ。いや少し違う。凛にとっては俺も街も村人も等しく大切なのだ。博愛主義者のように全てが平等だからこそ凛の大切には入れても特別には成りえない。俺は凛の“大切な幼馴染”止まりなのだ。ずっと凛を見ていたから、それくらいは判る。

そして凛の大切に成りえるとしたらきっとそれは凛と同じ目線の――……。

そこまで考えた所で振り払うように頭を振った。別にいい。俺は凛の隣に居れさえすればいいんだから。言い訳とか負け惜しみでもなくて純粋にそう思う。俺しか支えられない時に凛を支えられればそれでいい。

「……上手くいかないもんですね」

「そうだな」

葵の呟いた一言が重かった。きっと葵も俺と同じなんだろう。

諦めてはいる。だからといって期待を全部捨てられるかと聞かれたらそうではなくて。惨めだし無様だけど少しだけ期待してしまうのだ。一番近い、近いだけの関係に。

自分の硬くなった掌を見やった。何度も何度も狩りの練習をするうちに皮が剥けて、痛みを堪えるうちに一人前の狩人になれた。

この手で守れるものは限られているけど、それでも凛の為になればいい。

無言で隣に腰掛けていた葵の手を取れば抵抗は無い。俺より少し小さめの手はやっぱり俺と同じく硬い掌だった。

第六話

眩しい光にしぶしぶながら目を開ければいつの間にか辺りは明るくなっていた。早朝の痛いくらいの冷気が肺に入る。
見張りを交代した後直ぐ寝てしまい、おまけに夢も見なかったせいでぐっすりだった。自分でも思っていた以上に疲れていたらしい。洞窟の奥側で寝ている葵は未だ夢の中のようだ。傍には焚き火の後が黒くくっきりと地面に残っている。

「お！　風牙起きたな」

翔の声に振り向けば洞窟の入り口にでかい猪みたいな魔物を引きずっている凛と翔。
しかも翔の短い髪はあらぬ方向に跳ねていて寝癖にしたって酷すぎないか。元がさらさらそうなだけに余計目立っている。凛はといえば余り大きくない身体の殆どが猪で隠れていて顔だけが見えていた。

何というか朝っぱらから色々シュールな光景だな。

「おはよ。朝から凄いな」

「ちょっと見張り暇になっちゃいまして。翔と二人で朝御飯調達しにいこうって話になったんですよ」

それ朝御飯なのかよ。どう考えても三食分以上あるんだが。

にこやかに笑う凛の相変わらずの無計画さにため息が一つ。小さい頃から無鉄砲で無計画で無謀な奴だったが年々悪化してんぞ。

話し声で起きたのか、少し離れた所で寝ていた葵が体を起こした。綺麗に結わえてあるせいか全く乱れていない髪が翔と対照的でおかしかった。眠そうに目蓋をこすっていたが、猪もどきを確認した途端呆れたような表情を浮かべた。

「おはよう。もしかしてそれ、朝御飯ですか？」

もしかしなくても朝御飯です。どうやら俺の感性がおかしい事ではない事が証明されたようだ。感覚がおかしい二人は足りない？なんて見当はずれなことをのたまわっている。

よし、凛達をしかるのは葵に任せて調理ぐらいいい所見せるか。哀れにも倒されてしまった猪もどきに歩み寄り、早速使えそうな部分を切り出した。

「うめーっ！！　風牙お前天才だな！」

「美味しいでしょう？！　風牙の料理は本当美味しいんですよ」

「これは美味しいな。あの食材でこれだけのものを作るとは」

三者とも喜んでくれたようで何よりだ。自前の調味料とそこらへ

んでとれたハーブを使ったこんがり肉は思ったよりも好評だった。誇る程ではないが一通りの料理は出来るし長期の狩猟に備えて色んな場所で使える調理方法も知っている。俺が唯一凛に勝てるものだった。

自分の分を胃袋に放り込む。ハーブの香りが鼻腔を刺激して旨味を増幅させた。我ながら上手い。

「食べ終わったら出発すっかー。街行くんだろ、街！」

「翔汚い。食べかすが飛んでる」

はは。なんか翔って思ったよりも子供っぽいな。それに世話を焼く葵の様子を見ていると王子と付き人以外の何者にも見えない。絵本や童話なんかに出てくる腕白王子と苦労人の従者って感じだ。

「でも残りの肉どうしましょう……。結構ありますよ、残り」

「あー……」

その一言で全員の視線がさ迷う。考えてなかったらしい。

結局食いきれなかった分はとりあえず分けておいたがこのまま持っていけるわけも無い。保存食にしたいが全部燻製にしてしまうのは時間がかかるしなぁ。

「私と翔で持ち運べるようにする。ちょっと待ってて」

立ち上がった翔と葵。一体何をするつもりだ。

手をブラブラと振った後翔は目を閉じた。瞬間跳ね上がった魔力

に驚愕する。

「パゴス！！」

冷気が吹き抜けた。今朝吸い込んだ天然のものとは違う、強制的な冷たさが目の前にあった肉の塊を氷で多い尽くしていた。

あれだけの量を一瞬で、しかも初歩魔法でだ。パゴスってのは初歩の初歩、せいぜい水滴を凍らせるくらいの魔法のはずなのに。

流石に凛も驚いて、いなかった。

「凄いです！　どうやったんですか、それ！？　私まだ契約しかしてないんですけど魔法って凄いですね！！」

いや魔法も凄いが翔の才能のが凄いんだ、なんて言える雰囲気でもなく。

盛り上がる二人を余所になんとなく居心地が悪い視線を凍った肉塊に止めると葵が高速で手を動かしていた。

というか、手がぶれて見えるぞ！？

「な、何をやっているんでしょうか……？」

「収納」

単純明快な回答だけど要領をえない。なんだか挟む言葉も無いまま完璧な正方形が大量に出来上がっていた。しかも魔物の毛皮で簡易リュックまで作り上げている。

「流石葵！　これで出発出来んな」

手馴れた感じで凍った肉塊をリュックに詰めるとひょいと翔はそれを背負った。元々の荷物が剣とポーチだけだったとはいえ相当な重量があるはずなんだが。

「風牙、何ぼーっとしてんですか。行きますよー」

特に疑問を抱いていないのか凛はもう準備万端だ。取り残されている状況が嫌でとりあえず思考に蓋をした。少なくとも街に着くまでは何も考えるまい。うん。俺の幸せのためにそうしよう。

随分仲良くなったと思っていたが案外知らない事が多いの認識した洞窟の朝だった。

第六話（後書き）

更新頻度がまちまちですいません……。ちょっと暗めのが続いたので気持ち明るめで書きました

第七話

……はぁ。

なんだかあまりにも昨日と違いすぎる。小型のナイフで飛んできた破片をいなす。さっきからどんどん飛んでくるそれは翔が人間業とは思えないほどの速さで砕いたモンスターだ。

身体とほとんど変わらない大剣を奮う翔は疲れた様子をまるで見せない。朝から同じ調子で変わらずモンスターを殺し続けているのだ。大剣自体も刃毀れどころかモンスターの血を吸えば吸うほど切れ味が増すかのように鈍く光っている。きっと名工が鍛えた一品とか、王家に伝わる伝説のものだとかそういう謂れつきのものなんだろう。

「街までどのくらいだろうか？」

「あー、後一時間くらいだな。道沿いに行けばもうそろそろ川が見えてくる筈だからその川を越えれば国境を越えられる」

ひょいと珍しく生きたままぶつかってきたモンスターをかわした。蝙蝠に似たそいつの凶暴そうな牙にさえ気をつければ大したことはない。

若干モンスターの動きとかにも慣れてきて俺にも余裕が出来た。やはり凛や翔には及ばないが。昨日よりかなり涼しい気温も関係している。

この半日で色んな事に気づいた。どうやら俺らが歩いているよう

なそれなりに人が使用する道には魔法を使うような上級モンスターは出てこない。夜なら別だが、本で読んだ知識によれば知能もある中級以上のモンスターは討伐される危険性もある一般道には出現しないようだ。

それにモンスターにも色々タイプがあるらしい。俺の弓は村の狩人が使う特殊な祈りを付与したものだ。とは言っても飲んだくれの神父のおじさんだったからどれだけ属性が付与されたかは判らないが。

ともかくそれを媒介として放つ矢にも若干の聖性が宿るらしく、矢があたったモンスターの部位は崩れる場合がある。

多分聖性に弱いモンスターなんだろうな。

「にしても翔も葵も凄いですねー。私も鍛えてるつもりでしたが」

大剣を奮う翔は勿論、葵の使うダガー捌きも凄かった。両手にダガーを装着し必要最低限な動きで効率よく獲物を狩る技は熟練を感じた。とても俺達と同い年には見えない。

比べて翔の太刀筋は素人目から見ても力任せなところがあった。基本は抑えているが応用が出来ていない、とでも言うのだろうか。普段から凛の剣捌きを見慣れているだけに荒さが目立った。

……一番足手まといの俺が言える話ではないのだが。誰も言わないが実際俺が一番戦闘技術に関しては劣っていた。天武の才がある凛や翔はともかく葵に対しても届いていない。努力が足りていないのが歯痒かった。

俺がまともに使えるのは弓と接近戦専用の小型のナイフのみ。どうしても剣サイズの武器になると基本の動きしか出来ないし、扱い

なれていない。

「私は幼少の時から修練をしているから」

控えめに葵が放った返答が痛かった。十歳になるまで何もやっていなかった俺とは大違いだ。

凛を守るとか言っときながら、一番近いという位置に甘えていたのだ。努力も資格もいらなかったから。そんな理由で修練を行わなかった俺とは努力の量が違う。

昨日俺は葵と俺は同じだと思った。しかしそれは違う。確かに出発点は同じだ。凛や翔のような才能なんて俺達は持ち合わせていなかった。努力をする天才に追いつけないのも仕方が無い。俺は狭い世界しか知らないがどれだけ理屈を並べたって天才と凡人ではスタート地点に隔たりがあるんだ。

凡人がいかに努力したところで同じ分だけ努力されれば天才には追いつけない。

だが言葉は悪いが同じ凡人なら努力した量が多いだけ強いのは当たり前なんだ。

「葵はすごいんだぜ？　未だに俺葵に勝てないんだよ」

薙ぎ払うように魔物をまとめて蹴散らして先頭にいた翔が振り返る。黒の瞳が純粋に輝いていた。そこには負けてるなんて言う発言のわりに負の感情は欠片も見受けられない。

純粋な、人間だと思った。

「前見ろ前！」

木に擬態したモンスターを射殺す。太陽が真上を越えたあたりで気づいたがあの手のモンスターは顔のような部分が弱点らしい。正確に当てられるならば矢でも簡単に命を奪えた。矢が刺さった部分からモンスターの身体が崩れる。

「おおっ！？　サンキュー風牙！」

気にしなくていいからちゃんと前を見てくれ……。

無駄に殺した訳ではないが急所を衝いたモンスターの死骸を見て少し気分が悪くなった。魔王を倒すなら、世界を救わなきゃなれなきゃいけない。何より凛の傍にいたいならなれなければならないのだ。

暫く無言で歩き続ける。

朝から進んできたので疲労が溜まっていた。だがこの森の中安全に休憩出来る場所などそうそうない。昨日みたいな洞窟は相当な幸運に恵まれない限り発見できないだろう。だから休憩するには早く街につくのが一番のはずだ。

考えていた矢先にぴたりと葵が足を止める。

「……水の音がする」

ほぼ並んでいた葵が脱兎の如く駆け出した。無駄もなく速いのに足音がしない不思議な走りだ。

「よっしゃ！　凛、風牙、走んぞ！」

って、おい！　翔もそれなりに疲れてる筈なのに、いやあれだけの大剣と全員分の食料を背負っているのだから疲れていない方がおかしいのに駆け出した翔。

先に走り出した葵はもう随分先の方まで行っている。

「風牙！」

次いで凛も駆け出した。鎧を着ているのに全くその事を感じさせないくらいに速い。なんだか前にもこんな状況に陥った気がするが慌てて走り出す。凛の背中を追う。あまり長くない髪が左右に揺れている。

早く凛と並んで歩けるようになりたい。葵みたいに翔を守るような、並べるようなスキルを手に入れられるだろうか。

初めての街への期待を胸に俺たちは森を抜けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5095x/

伝説の反対側

2011年11月16日15時59分発行